

タイトル:平成 25(2013)年度 教育セミナー

日時:平成 25 年 9 月 20 日(金)～23 日(月・祝)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「トルコの都市貧困女性と結婚・扶養・愛情—暴力研究を超える名誉研究を目指して」

村上 薫 (日本貿易振興機構アジア経済研究所)

報告要旨

トルコでは 2000 年代に入ってから以降、フェミニスト、人権団体が名誉殺人防止のための刑法改正を訴えるなど、名誉殺人にたいする世論の関心が高まった。背景には、中東・南アジアや欧米移民社会における名誉を理由とする女性への暴力にたいする国際的な関心の高まりがある。

ここで問題になっている名誉とは、トルコ語でナームスと呼ばれる。ナームスの定義を述べておこなうなら、狭義には親族女性のセクシュアリティの管理を通じて維持される、個人や集団(家族・親族・村落共同体・民族)の名誉を指す。ある女性の名誉は彼女の親族の名誉でもある。これにたいし、広義のナームスは正直さや、人の道にかなっていること、それによって尊敬されること、自尊心を意味し、名誉の文化を構成するもうひとつの名誉シェレフと重なる。類似する概念は、中東や南アジアなどで観察される。

トルコの世論の名誉への関心の中心は、ナームス殺人である。マスメディアやフェミニスト、人権団体のナームス殺人へのアプローチは、これを後進性と関連づけるというものである。主流のアプローチにたいし、人類学者らによる批判は以下の四点に集約できる。第一に、ナームス殺人をクルド系住民に固有のものとする見方は、視点のエスニック化を招く。第二に、ナームス殺人は刑法が減刑対象としてきたことが示唆するように、国家に支持された近代的な暴力という側面をもつ。第三に、ナームスは、その解釈が交渉される社会的構成としてとらえるべきである。第四に、ナームスは社会の組織化の原理であり、帰属意識やアイデンティティと関係している。

以上を踏まえ報告者は、ナームスを理由とする暴力の防止には、ナームスを包括的に理解し、日常的な「暴力」未満のナームス現象を分析することが必要だと考える。すなわち、ナームスを理由とする殺傷と家庭内暴力、日常的な行動の規制、保護を連続するものとしてとらえる必要がある。

報告ではイスタンブールの低所得地区で実施したフィールド調査の結果の分析を通じて、以下の点を考察した。(1)女性のセクシュアリティの保護は、女性の身体や労働力の管理と一体である。これはナームス概念が経済的側面をもつことを示唆する。(2)経済的支援が無い限り親族による干渉は正当化されることがある。これは、近代家族的な家族観の影響のもとでナームスが夫婦間の愛情と結びつけて理解されるようになったことを示唆している。